

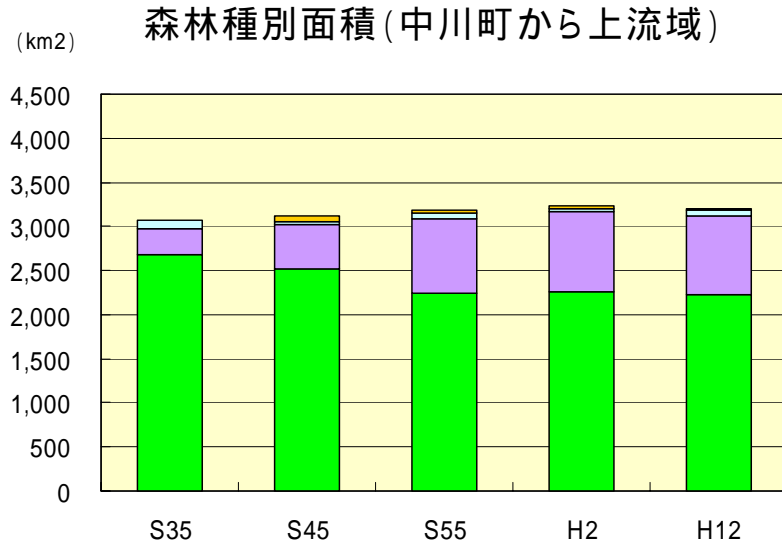
資料 - 4

H17.7.19

天塩川水系河川整備計画について

(追加資料 その4)

近年森林面積に占める天然林の割合は約7割と安定している。



間伐及び択伐等の状況

(関係機関から聞きとり)

国有林	間伐: 概ね10年に1回実施(人工林) 択伐: 20~30年に1回実施(天然林)
道有林	間伐: 概ね8年に1回実施 受光伐: 最短20年に1回実施
民有林等	

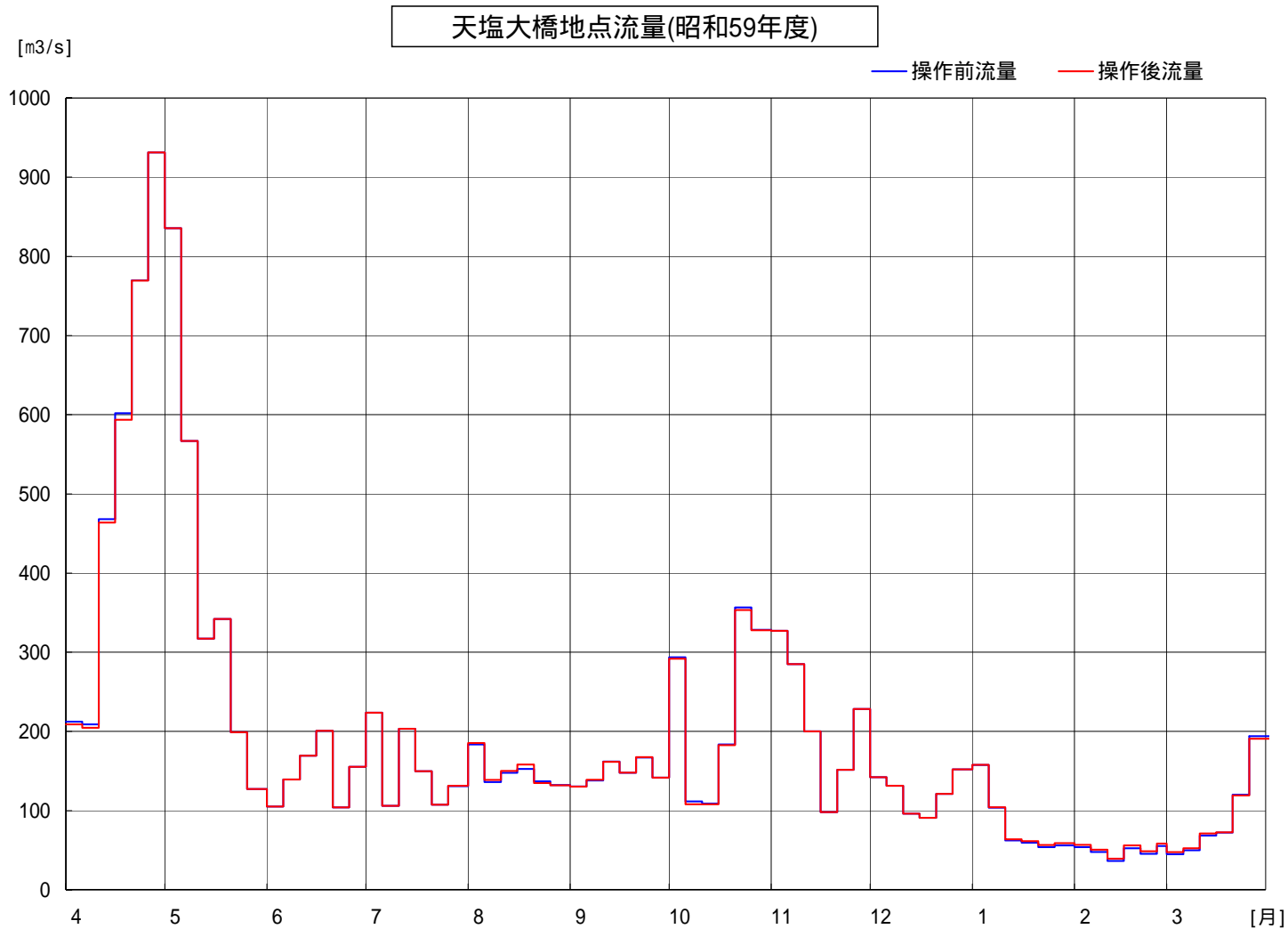
間伐: 育てようとする樹木同士の競争を軽減するために、込み具合に応じて一部の樹木を伐採すること。

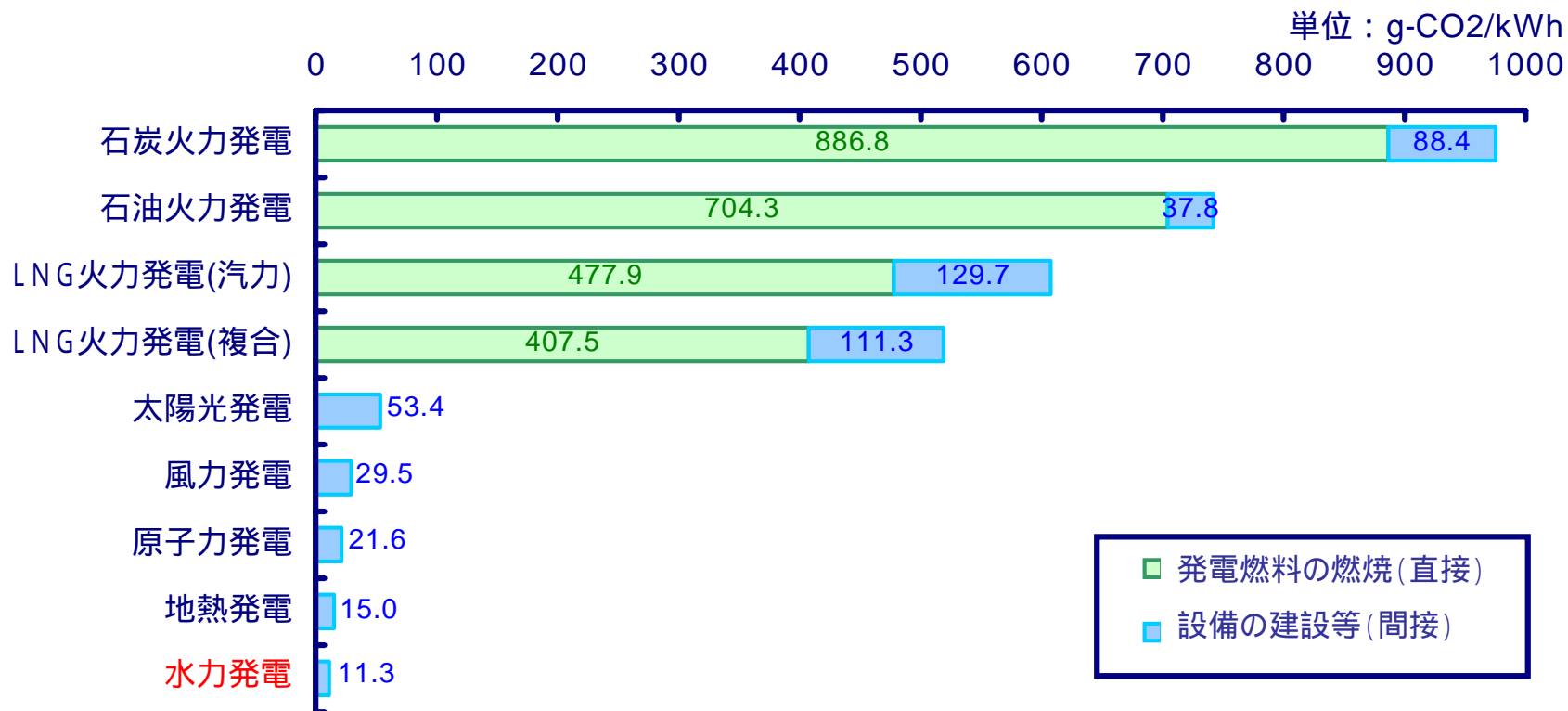
択伐: 多様な樹種及び多層の樹冠を有する森林に誘導するため、林内の樹木の一部を抜き切りすること。

受光伐: 植栽及び天然更新で発生した稚幼樹や下層木の成長に必要な光環境を確保するため、上層木の一部を伐採すること。

日本学術会議答申(平成13年11月「地球環境・人間生活にかかわる農業及び森林の多面的な機能の評価について(答申)」)においても、森林の多面的な機能について評価する一方で、森林の水源かん養機能(洪水緩和機能等)の限界について指摘しています。

- ・流況曲線上の湧水流量に近い流況では(すなわち、無降雨日が長く続くと)、地域や年降水量にもよるが、河川流量はかえって減少する場合がある。このようなことが起こるのは、森林の樹冠部の蒸発散作用により、森林自身がかなりの水を消費するからである。
- ・治水上問題となる大雨のときには、洪水のピークを迎える以前に流域は流出に関して飽和状態となり、降った雨のほとんどが河川に流出するような状況となることから、降雨量が大きくなると、低減する効果は大きくは期待できない。このように、森林は中小洪水においては洪水緩和機能を発揮するが、大洪水においては顕著な効果は期待できない。
- ・あくまで森林の存在を前提にした上で治水・利水計画は策定されており、森林とダムの両方の機能が相まってはじめて目標とする治水・利水安全度が確保されることになる。



発電別二酸化炭素(CO₂)排出量

出典：資源エネルギー庁より